対馬アクションリサーチ合宿の目的

阿部　治

1. はじめに

対馬市との連携協定を機に 2016 年度から本学学生の学びの場として対馬市のフィールドを活用させていただくと同時に、本地域創生研究プロジェクトを通じて同市の地域創生に資する具体的な研究活動を展開してきた。特に同市で課題となっている学校統廃合問題に焦点を当て、以下の問題意識と目的をもちながら、継続的な調査（2016 年度～）を実施している。

2. 研究背景・問題の所在

地域社会において学校は、授業や行事、地域活動を通じて、学区内の人的資源（資本）や自然資源（資本）、歴史・文化資源（資本）などの見える化・つなぐ化に大きな役割を果たしてきた。同時に、学校は地域の過去・現在・未来をつなぐ存在でもある。特に、地域の子どもに対する教育活動が地域の社会関係資本との密接な関わりのもとでなされてきた。また、学校の持つ学びの効果は、子どもの成長だけではなく、地域の大人たちの成長も促し、両者の相互作用から生み出される社会への信頼と地域の誇りの醸成は、地域社会の持続可能性に大きく関わっている。すなわち、地域のサステナビリティの視点からみると、学校はあらゆるものをつなぐ装置としての機能を果たしてきた。

学校が地域社会で有する機能は多面的であり、重層的である。しかしながら、今日の農山村での過疎化に伴う人口減少の下、全国的に学校の統廃合が実施されており、学校が地域社会において果たす役割の維持が大きな問題となっている。特に、コミュニティの基本単位とも重なる小学校区においては、学校の存在が地域の持続可能性にとって非常に重要であると考えられる。

3. 調査の目的

本調査の目的は、学校の統廃合が地域にもたらす影響や問題について、学校が地域のつなぎ役としてどのように機能している（してきた）のかを持続可能性の視点を含め様々な視点から明らかにすることである。

4. 今年度の概要

今年度は、対馬市の伝統的な暮らしや自然環境を知り、地域の課題や魅力を生かした教育を学ぶために、体験、見学、ヒアリング調査、ワークショップによる意見交換によるア

クションリサーチを行った。暮らしに関しては、神宮自然農園で自然と共生する対馬の伝統的な暮らしと環境に配慮した農業を体験し、ヒアリングを行った。自然環境については、対馬野生生物保護センターでの生態系保護に関する活動のヒアリングの他、佐須奈地区におけるツシマウラボシシジミ（絶滅危惧種のチョウ）の保全活動への参加、海洋プラスチック汚染（海ごみ）現場の訪問、対馬に生息するツシマヤマネコと野鳥の観察を実施した。教育に関しては、対馬市立仁田小学校と厳原北小学校で実施されているESDの授業見学と、担当教員へのヒアリングを行った。その他、対馬高等学校ユネスコスクール部とのワークショップによる「ツシマウラボシシジミの保全活動」に関する意見交換を行った。

上記の調査により、対馬市ならではの魅力や課題を生かしたESDの教育的価値を確認し、発展させていくための展望や課題について振り返った。